

見学用ガイド



CHÂTEAU DE
CHENONCEAU



ディアヌ・ド・ポワティエ (1499年～1566年)

国王アンリ二世の愛妾であったディアヌ・ド・ポワティエは、1547年にシュノンソー城を譲り受けました。ディアヌは美しさと知性に恵まれ、数々の事業に優れた能力を発揮し、その当時最も趣きがあり革新的と言われた、城の造園工事を実現させました。彼女はシュール川に橋を建築させ、シュノンソー城は世界に類を見ない建築物となりました。



カトリーヌ・ド・メディシス (1519年～1589年)

アンリ二世の未亡人となったカトリーヌ・ド・メディシスは、ディアヌ・ド・ポワティエを城から追い出し、更に庭園を美しく整え、城の建設工事を進めました。彼女は城のギャラリーを二階構造に建て直し、饗宴を催す場としました。カトリーヌは王の摂政となり、緑の書斎にて治世を執り行いました。シュノンソー城にイタリアの装飾様式を導入しただけでなく、若い国王の権力を制定しました。



ルイーゼ・ド・ロレーヌ (1553年～1601年)

ルイーゼ・ド・ロレーヌは、1589年に夫のアンリ三世を亡くした後、当時の宮廷にしきたりに従って白い服をまとい、シュノンソーに引きこもりました。世の人々から忘れられ、彼女は寡婦資産を受けて細々と生活し、読書、慈善活動、祈りを日課としました。彼女の逝去以降、シュノンソー城は王族の居城としての役割を果たしていません。

シュノンソー城 貴婦人たちの城



ルイーゼ・デュパン (1706年～1799年)

啓蒙思想の世紀と呼ばれた、18世紀の知識人を代表する、ルイーゼ・デュパンにより、シュノンソー城はかつての栄光を取り戻しました。彼女はこの城で知識人のサロンを催し、モンテスキュー、ヴォルテール、ルソーのような作家、詩人、科学者、哲学者を招きました。フランス革命時には、その機知によりシュノンソー城を守りました。



マルグリット・ペルーズ (1836年～1902年)

19世紀の産業資産家の出身であったマルグリット・ペルーズは、その好みに合わせ、1864年に城と庭園を豪華な装飾で満たす計画を立てました。彼女はディアヌ・ド・ポワティエの時代の城の姿を復元させるため、多大な費用を投じました。しかし政治的陰謀に巻き込まれた彼女は破産してしまいました。シュノンソー城は1913年まで数回に渡り売却されました。



シモーヌ・ムニエ (1881年～1972年)

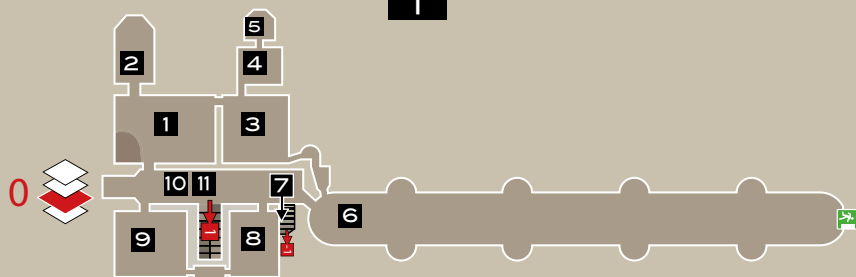
第一次世界大戦中は、戦場から離れたシュノンソー城においてさえ、戦争の影響が及びました。シモーヌ・ムニエの家族の出資（ムニエ・チョコレート工場の収益）により城のギャラリー部は二層とも病院に改築され、彼女は看護婦長を担当し病院を運営しました。1918年まで、2000人以上の負傷兵士がこの病院に入院し手当てを受けました。そのような勇敢な行為が行われたことにより、この城は第二次世界大戦（1939年-1945年）当時までレジスタンスの活動の場として、多岐に渡り運用されました。

シェール川をまたぐシュノンソー城を建設するため、トマ・ポイエとその妻カトリーヌ・プリソネはマルク家の城塞と水車を16世紀に取り壊し、塔の部分のみ残しました。そしてマルク家の塔はルネッサンス様式に作り変えられました。前庭は、中世の古い城の図面を再現し、堀に囲まれています。塔の脇には、マルク家の紋章であるキマイラと鷲のモチーフが刻まれた井戸が残っています。

要塞となっていた昔の水車の橋脚の上に建てられた城の方へ進むと、壮大な城門が見えます。フランソワ一世の時代に彫刻・彩色されたこの木製の門には、この城を建てたトマ・ポイエとカトリーヌ・プリソネの家紋がそれぞれ左側と右側に見え、その上にはフランソワ一世の紋章のサラマンダーとラテン語の碑文が彫られています：“FRANCISCUS DEI GRATIA FRANCORUM REX – CLAUDIA FRANCORUM REGINA”（神の恵みを受けたフランス王フランソワとフランス王妃クロード）

前庭とマルク家の塔





この部屋に武装した宮廷の護衛が控えています。

16世紀の暖炉がトマ・ボイエの紋章に飾られています。ルネッサンス期のオーク材の扉の上には、守護聖人（聖カトリヌと聖トマ）の像が置かれ、その下にトマ・ボイエとカトリヌ・ブリソネの次の金言が刻まれています。《S' il vient à point, me souviendra》すなわち、“シュノンソーが完成したならば、私の名は歴史に残る”

壁には、城での生活、結婚の申し込みや狩の場面が織られている、16世紀に作製されたフランドルの一連のタペストリーがかかっています。

ゴシック様式とルネッサンス様式の大箱。16世紀には、その中に銀器、食器、タペストリーがしまわれ、宮廷が城から城へと移動する際に使われました。

天井の梁には、カトリヌ・ド・メディシスの二つの“C”の組み合わせ文字が見られます。

床には、16世紀のマジョリカ焼タイルの跡が見られます。

護衛兵の間



護衛兵の間から、聖母マリアの像が上に据えられた扉を通して礼拝堂に入ります。

オーク材のこの扉には、キリストと聖トマが彫られており、聖ヨハネによる福音書からの引用が記されています。"INFER DIGITU TUUM HUC"; "DNS MEUS ET DEUS ME" ("ここに汝の指を置け" "あなたは私の主、私の神")

ステンドグラスはマックス・アングランの1954年の作品であり、もとのステンドグラスは1944年の爆撃によって破壊されました。

右手のロッジアには、カラレ大理石に刻まれたミノ・ダ・フィエソーレ作の聖母マリアと幼子キリストの彫刻。

礼拝堂の身廊を見下ろすように置かれた高壇は、王妃がミサに参列するための席で、1521年の日付が記されています。

祭壇の右手の石細工の祭器卓に、ボイエ家の金言が刻まれています。

壁には今も、女王メアリー・スチュワートのスコットランド衛兵隊が刻んだ英語の文が残っています。入口右側には、1543年の「人の怒りは神の裁きを成さず」と、1546年の「悪に征服されるべからず」の言葉が見られます。

壁にかかっている宗教画：

-イル・サッソフェラート「青いヴェールの聖母」

-アロンソ・カーノ「フェルディナンとイザベルに説教するキリスト」

-ジュヴェ「聖母被昇天」

-セバスチアーノ・デル・ピオンボ「キリストの埋葬」

-ムリリョ「パドヴァの聖アントニウス」

-15世紀のフランス流派的絵画「受胎告知」

フランス革命の際、当時の城主であったデュパン夫人の知恵により、この礼拝堂は薪の貯蔵庫として使われ、宗教性を隠したため、破壊を逃れました。

礼拝堂



1559年、アンリ二世が宮廷のスコットランド衛兵隊長ガブリエル・モンゴメリと行った謎めいた騎乗槍試合で命を落とした後、王妃カトリーヌ・ド・メディシスは未亡人となりました。彼女はディアーヌからシュノンソー城を取り戻し、その代わりにショーモン・シュール・ロワール城を与えました。

フォンテーヌブロー派のフランス人彫刻家、ジョン・グージョン作の暖炉及び格天井に、アンリ二世とカトリーヌ・ド・メディシスの頭文字、HとCが組み合わされ、ディアーヌ・ド・ポワティエのDを描いているように見えます。

この部分はマダム・ペルーズの出資により修復されました。天蓋ベッド、コルドバ革で作られたアンリ二世の肘掛け椅子、ベッドの脇の見事な寄木細工のテーブルはルネッサンス様式です。19世紀の美しいブロンズ像「アネット城のディアーヌ」は王の寵愛を受けた女性を表しています。また暖炉の上には、ソヴァージュによるカトリーヌ・ド・メディシスの肖像画が見られます。

16世紀にフランドル地方で織られた二枚のタペストリーは次の場面を表しています。
-「力の勝利」。旧約聖書の登場人物に囲まれ、二頭のライオンが引く戦車に「力」を象徴する人物が乗っています。

上のふちには、ラテン語で「天からの授かりを心から愛する者は、信仰に従い、たじろぐことはない」と記されています。

-「愛徳の勝利」。聖書の場面に囲まれた「愛徳」を象徴する人物が、手に心を持ち、もう片方の手で太陽を指しています。ラテン語の言葉は、「危機に瀕して強い心を示す者には、死した時褒美として救いがもたらされる」と読めます。

窓の左側の絵：リベラの師、リバルタの「衣服を脱ぎ捨てるキリスト」。窓の右側の絵：ムリーリョ「聖母子」。この絵の下に書棚には、シュノンソーの古文書が保管されています。ガラスケースに陳列されている一冊に、トマ・ポイエとディアーヌ・ド・ポワティエの署名を見ることが出来ます。

ディアーヌ・ド・ポワティエの部屋



カトリヌ・ド・メディシスは夫のアンリ二世亡き後王国の摂政となり、この部屋からフランスを統治しました。

16世紀の天井は当時のままで、「C」の組み合わせ文字が見られます。

「馬の鈴草様式」と呼ばれる16世紀のブリュッセルのタペストリーは、ゴシックとルネッサンスの両方の様式を取り入れた作品となっています。同時の緑色が青色に変色したその色合いと、アメリカ大陸発見のテーマが独特なタペストリーです。ペルーの銀色の雉、パイナップル、蘭、柘榴など、1492年までヨーロッパで知られていなかった動物や植物が題材となっています。

扉の両側の二つのキャビネットは、16世紀のイタリア製です。

壁にかけられた絵画コレクションの主な作品：

-ティントレット「シバの女王」と「総督の肖像」

-ヨルダース「酔ったシーレーノス」

-ゴルシウス「サムソンとライオン」

-リベラ「三司教」

-ジュヴネ「神殿から商人を追ひ払うキリスト」

-シュブランガー「寓話情景」 金属板に描かれています。

-ヴェロネーズ「女性の顔の素描」

-ブーサン「エジプトへの逃避」

-ヴァン・ダイク「猿と子供」

緑の書斎



かつて図書室であったこの部屋に、カトリヌ・ド・メディシスの仕事机がありました。ここからシェール川、中州、ディアヌの庭園のすばらしい眺めが望めます。

イタリア様式の、吊要石付きのオーク材の格天井は1552年に作製され、フランスに取り入れられた天井の様式としては初期の頃のもんです。この天井に、城を建てたトマ・ボイエとカトリヌ・ブリソネの、T.B.K.の頭文字が見られます。

扉の上の絵画：

- アンドレア・デル・サルト 「聖家族」 その両側に
- バッサーノ「聖ベネディクトゥスの生涯」
- ル・コレージュ(コレッジョ)「殉教者」
- ジュヴェネ「ヘリオドール」
- プーサン「オリンポス山にさらわれた神々の酌人、ヘベとガニメデス」

図書室



ディアーヌ・ド・ポワティエの部屋から、細い通路を通してギャラリー(回廊)に出ます。

1576年にカトリヌ・ド・メディシスは、フィリベール・ド・ロルムの設計に基づいてジョン・ピュランの施工により、ディアーヌ・ド・ポワティエの橋の上にギャラリーを建設させました。

全長60m幅6mで、18の窓があり、床には石灰岩とスレートを敷き詰め、天井梁が見えるこのギャラリーは、壮麗な舞踏会場でした。

1577年に完成した際、カトリヌ・ド・メディシスは息子である、後のアンリ三世への敬意を込めて宴を催しました。

ギャラリーの両端に二つの美しいルネッサンス様式の暖炉が据えられ、シェール川左岸へ続く南側の扉を囲む暖炉は、装飾であり暖炉の機能を果たしておりません。

19世紀初期に、プチ・オーギュスタン美術館(Musée des Petits Augustins)に所蔵されていた、著名人を表すメダイオンがこのギャラリーに飾られました。

第一次世界大戦中は、当時の城の所有者であったガストン・ムニエ氏が自費で城を病院に改装し、部屋は全て病院の各業務に割り当てられていました。

第二次世界大戦時、シェール川はドイツの占領地区の境を成していました。城の入口(右岸)は占領地区側に位置していましたが、ギャラリーの南側の扉は左岸の非占領地区に通じており、フランスのレジスタンスは大勢の人々をここから逃がすことが出来ました。戦争中、ドイツ軍は何時でもシュノンソー城を破壊できるよう構えていたのです。

ギャラリー





シュノンソーの厨房は、シェール川の川床に建てられた端の二つの橋脚が形成する大きな土台の上に位置します。

配膳室は、二つの尖塔アーチで構成されている、天井が低い部屋です。16世紀の暖炉は、城内で最も大きく、その横にあるのはパン焼釜です。

配膳室は次の場所に通じています：

- 食堂は城の従業員、そして一時期はルイズ・ド・ロレーヌ付きの侍従が利用しました。
- 肉の貯蔵室には現在も野禽の肉を吊るす鉤や、肉を切り分けるまな板が置かれています。

- 食料戸棚には食料が保存されていました。
- 本来の厨房に至る橋 橋脚から橋脚へと移動する際に、食料補給のための船付き場を見ることができます(言い伝えによると、この場所は「ディアヌの浴場」あるいは「女王の浴場」と呼ばれていました)。第一次世界大戦中に城が病院に改装された際、このルネッサンス様式の厨房に近代的な設備が取り付けられました。

厨房



この部屋の暖炉は、ルネッサンス様式の作品の傑作の一つに数えられています。

マントルピースの上には、二人の人魚に囲まれた扉の紋章に呼応する、トマ・ボイエの金言《S'il vient à point, me souviendra》“シュノンソーが完成したならば、私の名は歴史に残る”が見られます。

部屋の家具は、15世紀のフランスの食器棚3つと、16世紀のイタリアのキャビネットです。このキャビネットは、フランソワ二世とマリー・スチュアートの結婚祝いとして贈られたものであり、真珠貝の嵌め込み細工や象牙の羽ペン画が施された見事な調度品です。

壁には、フォンテーヌブロー派のル・プリマティスの「狩の女神ディアナ姿のディアヌ・ド・ポワティエ」の絵がかかっています。この肖像画は1556年にシュノンソーにて完成され、額縁にはエタンブ公爵夫人であったディアヌ・ド・ポワティエの紋章が彫られています。

その両側には、ラヴェスタンの子の三人の男の肖像画、ヴァン・ダイクの自画像、そしてミーレフェルトによる「飾り襟の付いた服装の女性」。

その隣の絵は、

「狩の女神ディアナ姿のロール＝ヴィクトワール・マンチーニ」です。マザランの姪であり、ヴァンドーム公ルイ二世の妻、メルクール公爵夫人であった彼女は、17世紀にシュノンソー城の所有者でした。

窓の両側：スルバランの「アルキメデス」と「二人の司教」(17世紀始め)

暖炉の右側にはファン・ローの「三美神」。ルイ十五世が相次いで寵姫としたネールの三姉妹、シャートルー夫人、ヴァンティミリア夫人、マイイー夫人がモデルとなっています。

フランソワ一世のサロン



ルイ十四世は、1650年7月14日のシュノンソー訪問を記念し、後にリゴーによる肖像画、オービュッソン織りのタペストリーに覆われた家具、そして高名な家具師ブールの小テーブルを、叔父のヴァンドーム公爵に贈りました。肖像画の見事な額縁はルポートルの作であり、大きな4つの木片のみで組まれています。

ルネッサンス様式の暖炉の上に見られる、サラマンダーと白鷺の紋章はフランソワ一世と王妃クロード・ド・フランスの滞在を表しています。

梁天井を囲むコーニスにはボイエ家の頭文字(T.B.K.)が見られます。

東側の壁には、ナポレオン一世がスペイン王として即位させたナポレオン一世の兄、ジョゼフ・ボナパルトから購入したルーベンスの「幼いキリストとバプテスマのヨハネ」が見えます。また、このサロンには17世紀と18世紀のフランス絵画のすばらしいコレクションが見られます。

-ファン・ロー「ルイ十五世の肖像画」

-ナティエ「ロアン公爵夫人」

-ネッテル「ルイ14世の大臣、シャミヤールの肖像」と「男の肖像」

-ジョン・ラン「スペイン王フェリペ五世の肖像」(ルイ十四世の孫)

また、ミニャールが描いたルイ十四世の銀行家、サミュエル・ベルナルの大きな肖像画も見られます。

富豪サミュエル・ベルナルは、デュパン夫人の父でもあり、ナティエによる肖像画には、優美と知性あふれる彼女の姿が描かれています。

婚姻関係により、ジョルジュ・サンドの祖母にあたるルイズ・デュパン(1706~1799年)は、18世紀にシュノンソーの城主となりました。百科全書派を支持し、ヴォルテール、ルソー、モンテスキュー、デイドロ、ダランベール、フントネル、ベルナルダン・ド・サンピエールを城に迎えました。フランス革命の際、シュノンソーは彼女の人徳により破壊を免れたとされています。

ルイ十四世のサロン



ホール天井は一連の尖塔アーチで形成され、要石をずれた位置に取り付けることで折れ線を描いています。

花籠飾りは、葉、バラ、天使の顔、キマイラ、豊穡の角(コルネ・コピア)で装飾されています。

1515年作のこの装飾は、フランス・ルネッサンス様式初期の、最も美しい装飾彫刻の一つとされています。

入口の扉の上部のニッチ(壁のくぼみ)には、シュノンソー城の守護聖人、パプテスマのヨハネと、ルカ・デル・ロビア風のイタリアの聖母の彫像が置かれています。イタリア産大理石の狩猟用テーブルは、ルネッサンス様式です。入口扉の上部に配されている現代的なステンドグラスは、巨匠マックス・アングランの1954年の作品であり、聖フベルトウスの伝説が描かれています。

ホール



ホールから16世紀のオーク材の扉を通ると、階段に出ます。

この扉には、古い戒律(一冊の本と巡礼者の杖を持ち、目に包帯を巻いた女性の顔)と新しい戒律(棕櫚と聖杯を掲げ、顔をあらわにした人物)を意味する彫刻が施されています。

二階へ上がる階段は、イタリアの真っ直ぐな(傾斜部分が重なるように作られた)階段を模して、フランスで作られるようになった初期のものです。天井部は傾斜が付いたヴォールト(丸天井)になっており、直角に交差するリブが組まれています。

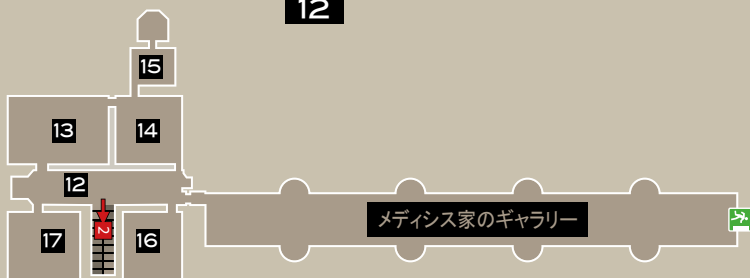
交差部の合わせ目には要石が配され、格間は人の姿や、果物、花の彫刻で装飾されています(一部はフランス革命時に破壊されました)。

二つの傾斜部は、手すりのあるロジgiaである踊り場で区切られ、ここからシェール川を眺めることができます。

二番目の上り口には、髪が乱れた女性の胸像を表した、当時の美しいメダイオンが飾られています。階段の他の箇所にも、このようなメダイオンが見られます。

階段





二階のホールの床には、短剣に貫かれた百合の花の紋章が押されている、テラコッタの小さなタイルが敷き詰められています。

天井には梁が見えています。

扉の上には、カトリーヌ・ド・メディシスがイタリアから取り寄せた大理石のメダイヨンが飾られています。古代ローマの皇帝(ガルバ、クラウディウス、ゲルマニクス、ウイテリウス、ネロ)を表しています。

壁にかかっているのは、ヴァン・デル・ムーレンの下絵による狩の場面が織られた、17世紀のオードナルドの6枚のタペストリーです。

ホールから続くバルコニーから、マルク家の塔と前庭を望むことができます。前庭は中世の城塞の跡に位置しています。

右側には土手に囲まれ、入口の事務所の管理人が手入れしているディアヌ・ド・ボウティエの庭園が見え、その反対側には真ん中に池を配した、よりひっそりとした佇まいのカトリーヌ・ド・メディシスの庭園が見られます。

カトリーヌ・ブリソネのホール



この居室は、カトリヌ・ド・メディシスの2人の娘と3人の義理の娘を記念して名付けられました。

2人の娘：

王妃マルゴ（アンリ4世王妃）、エリザベート・ド・フランス（スペイン王フェリペ2世王妃）、3人の義理の娘：

メアリー・ステュアート（フランソワ2世王妃）、エリザベート・ドートリッシュ（シャルル9世王妃）、ルイーズ・ド・ロレーヌ（アンリ3世王妃）。16世紀の格天井は、ルイーズ・ド・ロレーヌの居室の入り口の間にあった天井の板張りです。

暖炉はルネッサンス様式です。

壁には、16世紀にフランドル地方で製作された一連のタペストリーが掛けられており、そこにはトロイアの包囲、ヘレネの略奪、コロセウムでの競技、ダビデ王の戴冠が描かれています。

暖炉の左には、サムソンの生涯を描いた16世紀のタペストリーの一部が見られます。

家具は、大きな天蓋ベッド、木製極彩色の二つの女性の胸像で飾られた棚二架（15世紀ゴチック様式）、そして鋳が打たれた旅行用の箱です。

壁に飾られている絵画：

-ルーベンス「東方の三博士の訪問」。これはプラド美術館が所蔵する絵画の習作であり、スペイン王から購入しました。

-ミニャール「オロンヌ公爵夫人の肖像」

-17世紀のイタリア派絵画「アルゴ船員アドメスを訪ねたアポロン」

五人の王妃の居室



カトリヌ・ド・メディシスの居室は、彩色され金泥が塗られた、木製の格天井で覆われています。天井の格子内に様々なイニシャルが見られます。メディチ家の紋章と、中央にカトリヌの“C”とアンリ二世の“H”が組み合わさったイニシャルが表されている部分があります。その他の天井部は、緑の書斎に合わせ、植物を模った彫刻で装飾されています。この居室には彫刻家具が揃い、16世紀の貴重なフランドルタペストリーがかかっています。タペストリーには聖書の一場面である、サムソンの生涯が描かれています。

この一連のタペストリーの特徴は、縁に諺を象徴する動物が織り込まれていることです。

「器用は策略に優る」（“l’Habilité est supérieure à la Ruse”）の諺や、ザリガニと牡蠣が縁に織られているのが見えます。

この部屋の中央にはルネッサンス期特有の天蓋付きベッドが置かれています。ベッドの柱と横羽目板には彫刻が施され、古代のメダルから着想を得た人物の横顔の浮き彫りも見られます。

ベッドの右側には、木版に描かれたコレッジョの「愛の教え」がかかっています。この題材がカンバス地に描かれている作品は、現在ロンドンのナショナルギャラリーに納められています。

暖炉と赤レンガの床はルネッサンス期のものです。

カトリヌ・ド・メディシスの居室



カトリーヌ・ド・メディシスの居室からは、続きの版画展示室となっている、小さな二つの部屋に移動することができます。最初の展示室は、18世紀にデュパン夫人のためにシュノンソーに装飾が加えられた際の、美しい絵天井に覆われ、優美な暖炉が据えられています。

二番目の展示室はシェール川に向かって開いており、天井と暖炉はルネッサンス期のものです。

ここには各時代のシュノンソー城の姿を表した、様々な技法とスタイルの素描と版画のコレクションが展示されています。16世紀のディアヌ・ド・ボワティエの時代のサンギーヌ（赤チョーク）素描は、シェール川をまたぐ橋が描かれた最初の作品です。それから19世紀の建築家による水彩画に至るまで、シュノンソー城の建設と造園の進展、歴代の所有者のもとにおけるプロジェクトの数々が見られます。

版画展示室



シャトーの2階に新設された、メディシス家のギャラリーにて、これまで公開されていなかった絵画、タペストリー、家具調度品、芸術作品が展示されます。ピーエール＝ジュスタン・ウーヴリエ（1806年-1879年）による油彩画「シュノンソー城」、ヌイイーの1883年のタペストリー「シェール川」、17世紀以前の2部に分かれた食器棚、シュノンソー城が当初所有し、外部に移された後返還された家具調度品、「メディシス家のヴィーナスの像」、そして見逃してはならない、「キャピネ・ドゥ・キュリオジテ」（珍奇陳列の小部屋）などを御覧になることができます。また、シャトーの建設の過程とその歴史に残る事柄について知ることができる、数々の書類と古文書も展示されております。シュノンソー城の運命を数世紀にわたって守り通した6人の女性たちに関する伝記が、このギャラリーの見学をより豊かなものとしてくれるでしょう。

メディシス家のギャラリー



ここは王アンリ四世とガブリエル・DESTREの息子、ルイ十四世の叔父、そして1624年にシュノンソー城の城主となったヴァンドーム公セザールの思い出が残されている部屋です。

部屋には以下の調度品が展示されています。
-梁の見える美しい天井には、蛇腹を支える大砲が飾られています。

-ルネッサンス期の暖炉は、19世紀に金色に彩色され、トマ・ボイエの紋章が描かれています。

-西側の窓の両側に、17世紀の木製の女像柱が二本据えられています。

-壁には、17世紀の三枚の連続したブリュッセルのタペストリーがかかっており、ギリシャ神話のデメテルとペルセポネが描かれています。

ブリュッセルのタペストリーの特徴である華麗な縁飾りは、豊穡の角から溢れ出る果物や花をモチーフとしています

この部屋の天蓋ベッドと家具はルネッサンス期のものです。

窓の左側の絵：

-ムリリョ「聖ヨセフの肖像」

セザール・ド・ヴァンドームの居室



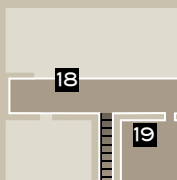
ここは王アンリ四世の愛妾であり、後に王の嫡出子となったセザール・ド・ヴァンドームの母であるガブリエル・デストレの部屋です。梁の見える天井、床、暖炉、家具はルネッサンス期のものです。

天蓋ベッドのそばにかけられた、16世紀のフランドル製タペストリーには、「城の日常の風景、愛情」の題名が付けられています。

それ以外の三方の壁には、「ルカの月暦図」と呼ばれる珍しいタペストリーがかかっています。六月：蟹座、羊の毛刈り、七月：獅子座、鷹狩り、八月：乙女座、収穫人の支払い。図柄はデューラーの友人であった、ルカ・ド・レイドによって描かれました。キャビネットの上の16世紀の作者不明の絵画は、音楽家の守護聖人である聖セシリアを描いたものです。

ガブリエル・デストレの居室





19世紀に当時の城主であったペルーズ夫人のために、ヴィオレ・ル・デュックの弟子であったロゲが修復を行いました。このホールにはその当時の姿がそのまま残っています。

16世紀のオードナルド製タペストリーは、コンボの戦いの様子を表しています（1389年6月15日のコンボ平原での戦い）。バルカン諸国のキリスト教の王族と、オスマン帝国の対立によるこの戦いの決着は不確定でしたが、セルビア女王ミリカと皇帝バヤズイト一世が和平条約を結ぶことで終わりを迎えました。

タペストリーの両側には、シュノンソー城を描いたピエール＝ジュスタン・ウーヴリエの作品が展示されています。二つの戸棚、テーブル、床張りはルネッサンス期のものです。三階のホールは、18世紀から19世紀にかけての間、“ブルボン・ヴァンドーム”と呼ばれていました。

三階のホール



ルイーズ・ド・ロレーヌは、夫のアンリ三世が1589年8月1日に修道士ジャック・クレモンに暗殺された後、瞑想と祈りのためシュノンソーに引きこもりました。

彼女を支え続けた、数少ない従者たちに囲まれて、王室の喪中の作法に従って常に白い服を身に着けていたルイーズ・ド・ロレーヌは、「白い王妃」と呼ばれるようになりました。

この部屋は、当時の状態のまま残っている天井に合わせ、復元されました。死の悲しみを象徴する鳥の羽(大羽根“Penne”が心痛“Peine”を象徴する)、銀の涙、墓堀人のシャベル、未亡人の編み紐、茨の冠、ルイーズの頭文字であるギリシャ文字ラムダ(Λ)とアン

リ三世の頭文字エータ(H)を組み合わせた模様が、この部屋全体に描かれています。フランソワ・クルーエによるアンリ三世の肖像画が隅の小塔にかかっています。

ゴシック様式に従った茨の冠をかぶったキリスト、宗教画(16世紀の祭壇の一部)、祈祷台が、この部屋の敬虔で陰鬱な雰囲気強調しています。

ルイーズ・ド・ロレーヌが側に仕えさせていたカプチン会の修道女たちは、17世紀に修道院に戻るまで、城の4階で暮らしていました。

ルイーズ・ド・ロレーヌの居室





ディアーヌの庭園

ディアーヌ・ド・ポワティエによる造園の時代から、花壇の構造は変更されていませんが、現在の図案はアシル・デュシェーヌ（1866年-1947年）によるものです。この庭園は、かつてカトリーヌ・ド・メディシスの近習の邸であった事務局が発注しました。

直角に交差する小路と斜めに交差する小路が、ワタシギクスの渦巻き装飾のある8つの三角形の芝生を縁取っています（12,000m²）。その中央には、造園された当時の噴水が再現されました。



シェール川の増水被害を受けないよう作られた土手の上に、飾り鉢が配してあり、見学者は低木、イチイ、桤、柘植、ローリエが植え込みに躍動感を与えている風景を眺めることができます。夏には、ここで百本以上のハイビスカスが花を咲かせます。それらの低木や花壇が、この庭園の厳格なほど幾何学的な構成を際立たせています。

秋にはパンジーとヒナギクが交互に現れ、冬中花を咲かせます。春にはペチュニア、タバコ、小型ダリア、バーベナ、ペゴニアが植えられ、そのまま次の秋を待ちます。

庭を囲みテラスを支える壁全面を覆うように、アイスパーク種の蔓バラが植えられています。



カトリーヌの庭園

カトリーヌ・ド・メディシス王妃の庭園はより控えめでありながら (5500m²)、優雅な印象を与えます。

シェール川とパークに面している庭園の散歩道からは、城の西側のファサードを眺めることができます。上品な円形の池の周辺に5つの芝生の庭があり、刈り込まれた柵植がリズムカルに植えられています。



庭園の東側は、城の堀の上部に位置する低い石垣に囲われており、「クレール=マタン」種のバラが壁面に沿って誘引されています。

木立バラと低く丸く刈られたラベンダーの畝が、調和の取れた縁取りを成しています。北側の緑の庭園とオランジュリーに向かって開ける眺望は、ベルナール・パリッシーの考案によるものです。



緑の庭園

この庭園は1825年に、その当時城の所有者で高名な植物学者でもあったヴィルヌーヴ伯爵夫人のためにシーモア卿が考案しました。公爵夫人の希望に沿い、緑の庭園はイギリス式で、カトリヌの庭園の北側に位置しています。

囲いのある芝生の庭園には、珍しい樹木のコレクションが陰を落としています。1世紀以上前から枝を茂らせているそれらの樹木群は、ブラタナス3本、アトラススギ3本、スペインモミ1本、アメリカキササゲ1本、マロニエ1本、ベイマツ2本、セコイアスギ2本、アカシア1本、胡桃の木1本、セイヨウヒイラギガシ1本で構成されています。

18世紀と19世紀に整備されたオランジュリーから緑の庭園を眺めると、その向こうにシュノンソー城の側面を望むことができます。

16世紀に、カトリヌ・ド・メディシスは動物小屋と鳥小屋を設けるためにこの場所を選びました。



迷路

城の城の70ヘクタールの林の空地に、カトリーヌ・ド・メディシスの命によって、二千本のイチイが植えられた1ヘクタールのイタリア式迷路が作られました。中央の小高い位置に東屋があり、迷路全体が見渡せるようになっています。東屋は柳で囲まれており、ヴィーナスの像が置かれ、その脇には若いパッカスを抱いたニンフの像が、ヒマラヤスギの柱の上に据えられています。柘植と鶯の植えられている鉢に縁取られている並木道が迷路を囲み、東側にはジョン・グージョンの作品である複数の女像柱が見られません。

それらのパラスとキュベレを表す女像柱、そしてヘラクレスとアポロを表す男像柱はシュノンソー城の正面を飾っていましたが、迷路の裏側に移動させられました。



引き馬のギャラリー

16世紀の農園の広い厩にある引き馬のギャラリーでは、貴族が乗っていたものから、農作業に使われていたもので、他では見ることのできない数々の馬車が展示されています。フランス特有の御者台の高い4輪馬車や、後部座席を覆うカバーの付いた馬車、イギリスが発祥地の馬車、ティルパリー（無蓋軽装二輪馬車）は、当城の文化遺産に数えられ、大切に保管されています。名士の馬車や農地で使われていた馬車は、主に19世紀に活躍しましたが、現在でもまれに田園地帯にて見ることができます。



16世紀の農場

見事な16世紀の農場は、カトリーヌ・ド・メディシスの厩舎で構成され、菜園に隣接しています。建物の中央にはフラワーアートのアトリエがあり、現在二人の園芸家が働いています。この場所もシュノンソーの魅力のひとつとなっており、城の各部屋のブーケは毎日手入れされています。見学者たちを城の客人として招くよう、常にみずみずしい花のブーケで各部屋を飾り、冬は暖炉に火を欠かさなようにしております。



花畑

花畑も見学コースに含まれており、寛いだ散歩に適しています。花畑は林檎の木とクィーン・エリザベス種のバラに囲まれた、12の四角形の畑で構成されています。城の役10人の園芸家たちは、城の装飾に使われる百種類もの観賞用の花と400本のバラの木を育てています。また、見学者はここで数多くの野菜と植物を観察することができます。その他に、珍しいチュペローズやアガパンサスの花などが植えられています。昔の温室のなかでは、黄水仙、アマリリス、水仙、チューリップの球根や苗木が育てられています。隣のロバの牧場だけでなく、見学者はこの花畑で多くの鳥や小動物に出会うことがあります。



オランジュリー – サロン・ド・テ（喫茶室）

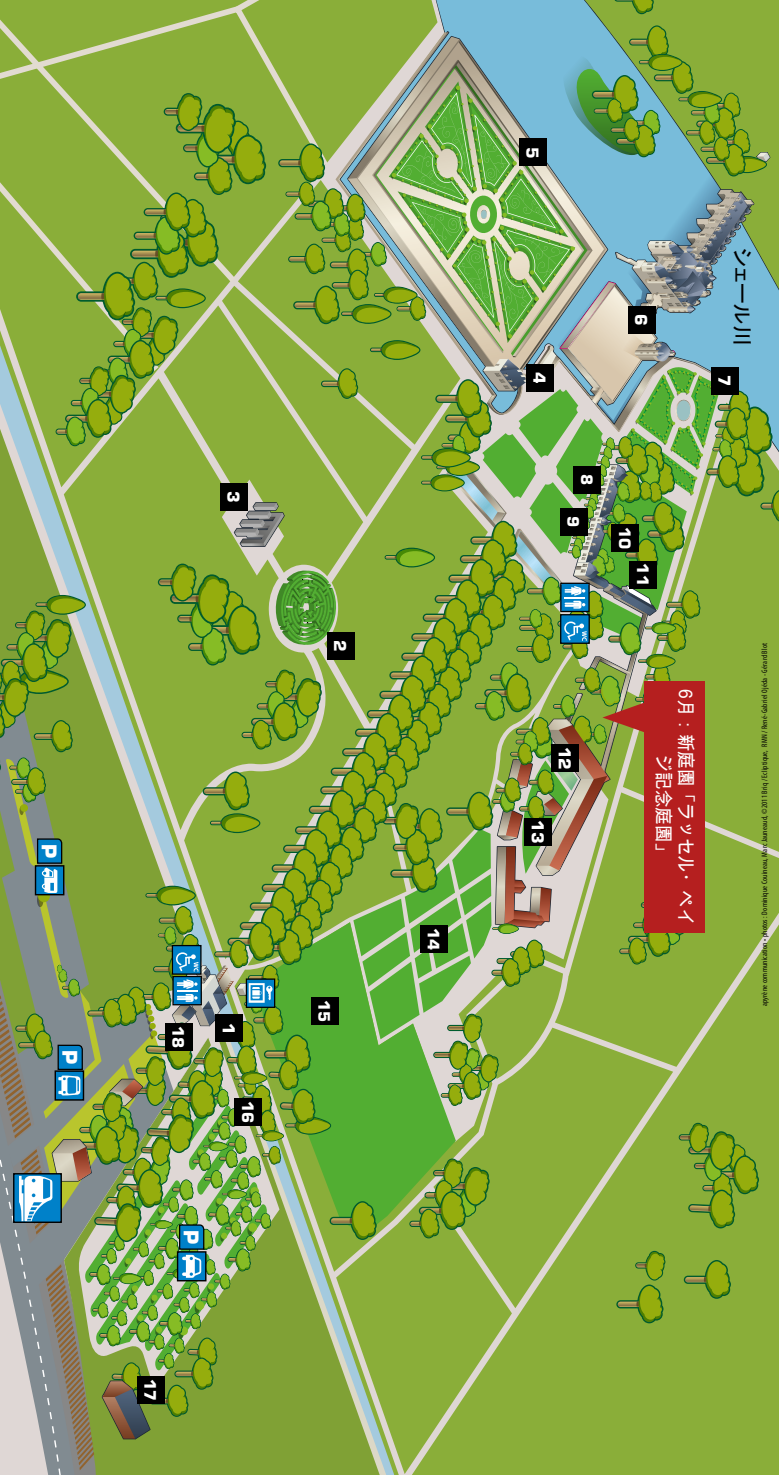
現在高級レストランとなっているオランジュリーは緑の庭園に面し、以前はオレンジの木やレモンの木を冬季中保管しておくための建設物でした。アンリ2世の妻であったカトリーヌ・ド・メディシスは、フランス料理の分野においてもイタリア文化を導入しました。

現代の現地特産品を重視する風潮よりずっと時代を遡る18世紀のことです。ジャン=ジャック・ルソーの四季に従った地域の作物を利用するという原理に、シュノンソー城の才知にたけた女主人、マダム・デュパンが関心を寄せました。ルネッサンス期の饗宴から、おもてなしの作法、高級料理、その繊細さはシュノンソー城の伝統となっています。

高級レストラン、オランジュリーはこのエスプリを継続させ、今年ジョルジュ・ブランとベルナル・ロワゾーの下で修練を積み、エトワールを獲得したシェフを迎えました。

城のパークの周りのブドウ畑では、16世紀から今日に至るまで定評のあるワインが生産されています。ドームの歴史あるカーヴにて、新しいAOCトゥーレーヌ・シュノンソーのワインの試飲をすることができます。

シュノンソー城のレストランとサロン・ド・テは3月中旬から11月中旬まで開店しております。レストランにアクセスするには、シュノンソー城の入場料をお支払いになる必要があります。



6月：新庭園「ラッセル・ベイ
シムラ記念庭園」

- 1 入場券売り場 / 売店
- 2 迷路
- 3 女像柱
- 4 管財人の家
- 5 デイアーンの庭園
- 6 シュノンソー城

- 7 カトリーンの庭園
- 8 セルワ・サーピスのカフェテリア
- 9 ボーム展示室
- 10 ボーム地下室
- 11 高級レストラン・緑の庭園
- 12 馬車の引き具展示室

- 13 16世紀の農場
- 14 花畑 - ミュージックガーデン
- 15 ろば公園
- 16 ピクニック・エリア
- 17 ピクニック・エリア (屋根付き)
- 18 クレーン売店

無料駐車場

無料Wi-Fi

無料ロッカー